

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第 卷四十五第

月二年七十和昭

論叢

日本經濟學の源流……………

經濟學博士 本庄榮治郎

資本主義的論理……………

經濟學博士 柴田敬

江戸時代の經濟問題……………

經濟學士 堀江保藏

海運政策の積極性……………

經濟學士 佐波宣平

景氣循環過程に於ける消費財產業の意義……………

經濟學士 青山秀夫

研究

サマル『人口論』の形而上學的基礎……………

經濟學士 白杉庄一郎

事變下の中小工業と金融……………

經濟學士 田杉競

トーマス・マンの重商主義思想……………

經濟學士 堀江英一

說苑

宋代の農田に就いて……………

經濟學士 穗積文雄

附錄

彙報・外國雜誌論題

「生よ繁殖よ」について

澤 崎 堅 造

舊約聖書に於て「生よ繁殖よ」と云ふ言葉及びそれに類する言葉は、大體創世記に多く見られるのであるが、それらを網羅して見ると、思想的に二つの段階に分けられるやうに思はれる。その第一は一般人類に關して自然との關聯に於て、即ち動物や植物との關聯に於て見る傾向であるが、それに對して第二は古代猶太の國民的範圍に關して、主として自己の民族とか國土とかに關して考察することが多いものである。例へば創世記の第一章二十二節、二十八節、第八章十七節、第九章一節及び同七節などは正に前者の場合であるのに對して、イスマエルの父祖について民族の繁榮と國土の擴張とを述べた創世記第十二章二節以下、第十三章十四節以下、第二十六章四節、同二十二節以下、第

二十八章十三節以下及び第四十六章三節などが後者の場合である。

ところがこれを更に文獻的に見ると、大體前者が所謂P文獻に屬するものであり、後者がJ文獻又はE文獻に屬するものである。P文獻といふのは、先述の如く、大體西紀前六世紀の頃、J文獻は同九世紀頃、E文獻は同八世紀頃記述又は編纂されたものとされる。従てJ文獻は記述年代が最も舊いものであるのに對して、P文獻は最も新しいものである。前者が作られた時代は、イスマエル民族がカナンの地に入り王國を建設し、南北二朝に分れたといふ時代である。従て内に危機を孕み、外に外國の壓迫が加はりつゝある時であつたからして、當然に自己國力の充實が最も要求された時代である。従て彼等の父祖の事績を述べるに當つても當然にその民族の繁榮と國土の擴張とがひたすら希はれたものであらう。ところが之に對してP文獻がなされた時代は、既にして南北二朝は倒れ、或は北に或は東に捕はれた後に、再び故國に歸へることが出來

たが、また新しい外國の支配と影響との下にあるやうになつた。この時に於ては、自己民族の繁榮とか國土の擴張とかの眼前の樂觀的希望は既に幻滅化して、むしろ却てより雄大な、永遠的且つ世界的な計劃へと希望するやうになつた。こゝに於て宇宙創造とか人類起源とかの問題を取扱ふやうになつた、とさう思はれるのである。

かくて、創世記に現はれた「生よ繁殖よ」の言葉について、これを思想的に見ても、文獻的に見ても、二つの段階に分けられるやうである。一つは人類的・自然的であり、他は民族的・國土的であつて、且つ前者は比較的新しい文獻、後者は比較的舊い文獻であるといふことがわかる。

II

そこで「生よ繁殖よ」についてより、概括的に示すためには、比較的に新しいP文獻によるのが適當である。そこで自ら創世記第二章二十八節の、人口に最も膾炙したる句、「神彼等を祝し神彼等に言たまひけるは、

「生よ繁殖よ」について

生よ繁殖よ地に満盈よ之を服従せよ。又海の魚と天空の鳥と地に動く所の諸の生物を治めよ」について述べることにするが、特にその中の五つの動詞について語義を述べることによつてその思想を窺つて見たいと思ふ。

(イ) 生よ——この原語 *paia* は「果實を齎らせ」と云ふ意味である。英譯では *Be fruitful*、獨譯では *Sich forchten* である。從て寧ろ果實を齎らす状態にあればと云ふ意味に近い。これは神が人祖(男・女)に對して云つた祝福の言葉である。果實を齎らし生を作るといふことは、直接的には人間の業ではあるが、なほそれには神の業が備へられてゐることを意味する。即ち人間の生の前に、準備として自然及び動植物界へも増殖の祝福が與へられてゐることを見て明かである。從てこの「生よ」といふ言葉は、受身を根柢に置いたところの能動であると云ふことが出来る。

(ロ) 繁殖よ——この原語 *paia* の意味は「多くなれ」又は「多くあれ」(量、質共に)といふのである。英譯は

multiply、獨譯は *meheret* である。即ち果實が齎らされるのみでなく、一層それが繁殖して何倍かに増大することを示してゐる。従てまたこの「多くなれ」とは、その中に既にマイナス(減少・死)を含めてゐて、それにも不拘なほ増加すると云ふ意味であることは、この文意を見ても、その當時の状態を見ても明かである。

(ハ) 満盈よ——この原語 *min* は「一杯になれ」といふ意味である。英譯は *replenish*、獨譯は *füllen*。満盈よの代りに「饒く」(*sharats*)を用ひた場合もあるが、同じ意味である。なほ「地に満盈よとあるが、この地(earth)とは廣く一般に地球上を指すとも見られるが、既に「文獻に於てはこれを「國」又は「天下」と譯すべき場合に用ひてゐる。従てその場合は一定の限界に於ける國を指すやうである。従てまた萬邦といふ意味にも用ひられる。

(ニ) 服従せよ——原語 *knaha* は、脚下に敷け即ち「征服せよ」といふ強い意味の言葉である。英譯は *submit*、獨譯は *untertan* である。「之を」服従せよの之と

は何を指すか。地を指すこと明かである。従て前掲の如く、國を意味し、そこに於ける諸生物をも意味するものと思ふ。

(ホ) 治めよ——原語 *gav* の意味は「支配せよ」であり、前掲「服従せよ」と餘り意味は違はないが、強ひて云へば「服従せよ」は直接的で且つ意味が強い。それに對して「治めよ」は間接的で幾らか弱い。後者は地を指すよりは、その上のもの即ち諸生物を指す。英譯は *have dominion over* と云ひ、獨譯は *herrschaft über* と云ふ。この治めよは二十八節に於ては「海の魚と天空の鳥と地に動く所の諸の生物」を指してゐるが、それは二十四節にも二十六節にも示されたところである。この對象に對する關係が如何なるものであるかは詳しくはわからないが、唯食物の關係についてのみは次の二十九節に「我全地の面にある實蕨のなる諸の草蔬と核ある木葉の結る諸の樹とを汝等に與ふ。これは汝らの糧となるべし」とあるので明かである。従て此處では、人間は動物を食用とせず、また植物にしても種の成る

3) 創、8: 17; 9: 7 (P)。
4) ノア以後に於ては動物の肉をも食した。併し「血のまゝに食すべからず」との規定がある。創、9: 3, 4。

草木に限るとしてゐる。尤も二十七節と二十八節とを獨立させて、當時人口に膾炙されてゐた歌であるとするれば、自ら意味が異つて来て、二十九節以下はその説明にならず、二十八節の「治めよ」はもつと廣い意味になるであらう。

なほ創世記第二章第四節以下には、J文獻に基いて同様な人類始祖のことが述べられてゐるが、その十五節に「之を理め之を守らしめ」とある。その「之」とは所謂「エデンの園」を指す。この「理め」の原語 *abalah* の意味は「耕せ」である。英譯は *dress*、獨譯は *baute*。また「守れ」とは *shamah* で「衛れ」といふ意味である。英譯は *keep*、獨譯は *behalte*。理めるとは、それ自身の持つ本來の能力を積極的に發揮させると云ふ稍々對内的なものであるが、これに對して守るとは、外敵の來らざるやう看視し、それを防ぎ、妨げを取り除くと云ふ意味である。稍々消極的な對外的な働きである。けれどもこの兩者とも前掲の「服従せよ」又は「治めよ」の中に自ら包含されてゐるものと思ふ。

「生よ繁殖よ」についで

三

以上の語句を通して示された古代猶太の人口觀或は自然・社會秩序に對する關係について、その思想の要點を掲げると、

第一は、人口を實存的人間の觀點に於て考察すること。人間が存立すること自體を根柢的に問題とする。従て人間は何に依つてあるのか、如何様にして生は作られたのであるかといふことが問題となる。人間の生は、多くの自然・生物と共に神によつて創られたものであること、また人間の生は他を生む能力をも同時に附與されたこと、従て「生めよ」との神の祝福の言葉に基いて生むことが出来るのである。かくて自ら、人間が人間を生むことの前に、生む者自身が生まれられたこと及び生む能力をも與へられたと云ふことを自覺しなければならぬ。

併し人間は常に必ずしもこれを自覺し又は肯定しない。人間の生は人間の意慾に基く以外の何ものでもないとするものが多い。神を認めずその律法に背くことを罪と云ふ。この罪によつて人間の生には死が這入つ

て来た。そして死は生の終りに来るのではなくして、常にその生の裏にひそむものとなつた。

第二は、人口の増殖は本来神の祝福であつたこと。

故に「繁殖よ地に満溢よ」とある。これによつて人類或は民族は繁榮し國土は擴張されるものとした。神がアブラハムへの言葉に「爾の目を舉て爾の居る處より西東北南を瞻望め。凡そ汝が觀る所の地は我之を永く爾と爾の裔に與ふべし。我爾の後裔を地の塵沙の如くなさん」とある。

然るに、人間の生が神の業ではなくて人間の恣意に基くものであるとするやうになつてから、即ち罪と死とが這入り込んでからは、増殖は必ずしも祝福ではなく、却て多くは呪ひとなつた。かくて生の増殖はまづ女によつて「懐妊の劬勞」となつたと。

第三に、人口は自然或は生活諸條件に對して、本来は神の祝福による一定の秩序關係にあつた。即ち調和があつた。人間と自然又は生物に對する支配關係は、食糧に關してさへ詳細な秩序が保たれてゐたこと。然る

にこれが現實に於ては破れた。それは罪と死とを荷負ふ人間に於て、今や「面に汗して」働かねばならず、而も「勞苦して食を得」るのが男の務めとなつた。

かくて、かゝる現實の不調和から、如何にして本来の調和、神の祝福或は神の秩序を取り戻すかと、古代猶太人口觀の最後の課題となつた。酷薄なる自然と惡意に充てる社會とに對して、意力を以て對立し一が他を克服せんとする態度に於て爲されるか。仍ち限られたる自然に對して人間は相互に鬭争を以て打開せんとするのであるか又は生については救濟といふことによつて罪を克服し、出生と増殖については復活によつて死を克服し、自然との關係については奉仕によつて勞苦を克服せんとするのであるか。古代猶太にあつては勿論十分にはなかつたが、その後者の方向をたどつたと云へる。

(註)「生よ繁殖よ」なる言葉について、またその思想については、古來多くの人によつて直接・間接に問題とせられたが、就中ジュニスミルヒの神の秩序論(七四一年)やマルサスの人口論(七九八年)などが有名である。なほ最近に於ても、例之 W. Winkler や F. Weyr に於てこの種の問題に關聯して論争が行はれたのを見よ。cf. Revue de l'Institut International de statistique, 1937, 2. l. p. 115-131 et 4. l. p. 329-339. (一六・一一・一一)

- 13: 14.
- 3: 16.
- 3: 19.
- 3: 17.
- 創、創、創、
- 創、創、創、
- 創、創、創、
- 創、創、創、
- 創、創、創、